

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話：070-1503-6401/044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第 187 号

白井義胤翁
 を訪ねて 9

紳士録への記載

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

著名人の一人に

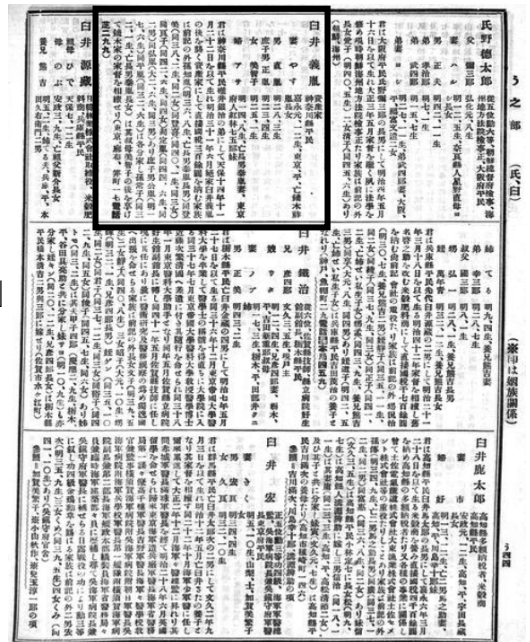
個人情報保護が強調され、かつまたインターネットの普及でネット検索が一般化したあおりで、今世紀に入ってからは、いわゆる紳士録の類は見かけなくなりました。かつては探偵社などが備え、会社関係などかなりの需要が見込まれたため、紳士録の出版を主たる業務とする出版社も存在しました。こうした紳士録ブームは欧州で始まり、紳士録に採録されること即ち上流階級の一員として認められたことに通じると、出版前後は大きな話題を呼んでいたのです。

そんな紳士録ですが、日本では 1902 年 (明治 35 年) に人事興信所を設立した内尾直二氏が、翌 1903 年 (明治 36 年) に第一版を出版した『人事興信録』(以下『興信録』と略記)が有名です。明治維新から 30 余年が経過し、曲がりなりにも近代社会の骨格を創り上げた当時の日本社会で最上層の人々を採録した書物です。失礼があつてはならないと皇族は含まれていませんが、華族、元老、貴族院や衆議院の議員、全国の道府県知事、市長から経済界の重鎮、帝国大学教授や裁判官、軍の長老や将軍、そして大地主に大富豪、その他日本に居留する外国人を含む有名人などを採録して、身分・職業だけではなく、戸籍調査等に基づく家族や親戚関係まで掲載していました。ただ第一版は創業から間もない出版であったため、上流人士を網羅したとは言い難く、掲載漏れも多かったため、内尾氏は直ちに第二版の出版に取り掛かり、慎重の上にも慎重を期し、5 年を要して 1908 年 (明治 41 年) に第二版を出版しました。その後も読者からの情報提供まで受け付けながら版を重ね、3~4 年毎に新しい版を出版し続けてゆきます。当然、経済界の重鎮に評価され、財界の一員に加わった大富豪として白井義胤翁の名も、『興信録』に登場します。

幸いというべきなのでしょうが、『興信録』の研究対象としての価値に注目した名古屋大学法科大学院の法学研究グループが、『興信録』のデータベース化を志して広くデータを公開、全国的な研究のネットワークの構築を目指してくれたため、2018 年に公開された『興信録』第四版 (1915 年 大正 4 年発行) を、私も目にすることが出来ました。収録人士を姓のいろは順で記載しているのですが、全体のほぼ中央付近に当たる「う」姓の項を見ても、40 頁を越えてきます。そんな事情ですから、簡単にフルネームで検索できるデータベースは大変便利で大いに助けられました。白井義胤の名は、「う」項の 44 頁の上段に記載されていました。

『興信録』は次のように記しています。「白井義胤 神奈川県平民 資産家 男性 天保 14 年 (筆者註 1844 年) 11 月 22 日生 家族：妻ヤス嘉永元年 (1851 年) 12 月生：亡鐮木祚胤長女 男直胤 庶子男正胤 女美智子 婦アサ：亡長男泰胤妻 東京府紅林七五郎妹。君は神奈川県平民碓井銀治の弟にして資産家、直接国税三百余円を納む。庶子男公胤、同平胤は分家し、孫常子 (長男泰胤長女) は叔母美智子の後を受け鐮木家の家督を相続。住所：東京府麻布笄町 17 電話：芝 299」義胤翁の資産内容は詳らかでないのですが、三百余円の現在価値がどのくらいかを、当時の給与と比較してみましょう。大正前期の新人教員給与は 40 円~50 円、戦中の昭和 16 年当時で 70 円程度でした。現在の大卒初任給は 23 万円~25 万円程度ですから、およそ 5 千倍といったところですね。従って、現在価値としては、150 万円程度を納税していたのですね。

この『興信録』第四版に登載された人物は一部に女性や外国人を含んで 13,917 名でした。日本が米国起源の全国国勢調査に参加するのは、1920 年 (大正 9 年) の調査が最初です。そのため 1915 年の総人口は、やや正確さに欠けますが、5,725 万 2 千人と報告されています。1 世帯当たり家族数は平均 5 人強とされていますから、世帯数は 1,060 万程度です。義胤翁は、全世帯数の僅か 0.131% に過ぎない著名人に列し、名士として遇されていたことが分かります。(続く)



『人事興信録』第四版うの部 44 頁

シリーズ

麻生区の地名 その 12

岡上の地名

菊地恒雄(日本地名研究所 研究員)

岡上は川崎市の飛び地として注目されていますが、それにはいくつかの訳があります。まず、現在はオカガミと言いますが、江戸時代まではオカノボリと言っていたようで、岡登や岡上りの字が当てられています。現在鶴見川は岡上の地内を流れていますが、古くはもっと北側のところを流れていました。真光寺川とはもっと上流部で合流し、流れが激しいところでした。川底が深く、村に入るにはまさに登るという形容がぴったりだったと想像できます。

永禄 2 年(1559)の『小田原衆所領役帳』には「小机奈良岡上」とあり、隣村の奈良と一緒に支配されていました。江戸時代になって、慶安 2 年(1649)の『武蔵田園簿』では多磨郡と記され、元禄 15 年(1702)の『元禄郷帳』でも多磨郡とあり、文政 10 年(1827)の改革組合村編成では、小野路連組合村に属していました。

明治元年(1868)の『旧高旧領取調帳』に都筑郡とあるところから、江戸末期には都筑郡に属していたと思われまゝ。しかし、明治 5 年の学制では岡上村は三輪村学区となり、訓導など教師も能ヶ谷村から派遣されていました。そのような関係から、明治 22 年の市制・町村制にあたり、岡上村は一村で独立していくこととなりますが、村の事務手続きが煩雑になるため、柿生村他一ヶ村組合村として神奈川県に提出するのです。

現在岡上は市街化調整区域と市街化区域を分けて住居表示を実施し、岡上 1~6 丁目と岡上になります。川や主要道路で分けられていますので、字境が丁目とは一致していません。

字川内(かわち)は鶴見川の北側の地です。能ヶ谷に接しており、真光寺川が複雑に流れていましたが、現在は鶴見川に直接つながるようバイパス化しています。カワウチの短縮形でカワチとなったと思われまゝ、二つの川の合流点に位置しているのでカワアイ(川合)の意味も考えられます。

字開戸(かいと)は集落を意味する垣内の転訛と考えます。早くから開けたところで人々集まる村の中心でした。

字関(せき)は小名に関村とあり、「北の方にあり、堰ある故にこの名ありと云ふ」と書かれており、本村橋のやゝ上手に堰の残溝がありました。

字宝殿(ほうでん)は昭和 7 年に開戸と関の一部からなる新しい字で、東光院のある付近をいい、「境内御朱印地、新義真言宗京都三宝院の末、岡上山宝積寺と号す」とあるので、その名によると思われまゝ。

字栗畑(くりばたけ)も昭和 7 年に開戸の南の台地に付けられた新しい字で、字丸山の一部を含みます。ここは小名阿部ノ原と呼ばれ、「阿部の原廃寺」の旧蹟が発見され注目されました。また岡上神社も字栗畑にあり、元は諏訪神社と呼ばれましたが明治 42 年に村内各社を合祀して岡上神社と改めました。

字川井田(かわいだ)は小名にも同名があり、鶴見川に沿った地域で旧流路が北側の大蔵に接しています。後に鶴見川に沿った地域が字川井田下として分割しています。

字杉山(すぎやま)は村域の西南端に位置し、町田市金井に接しています。和光大学の金井キャンパスが両町にまたがっています。昭和 7 年にこの杉山と川井田の一部が字杉山下(すぎやました)となりました。昭和 40 年ころから住宅地として造成され、岡上西町会を編成しています。字丸山(まるやま)は周囲が丸い山の地形から付けられていました。岡上小学校用地から岡上丸山遺蹟が発見されました。

現在岡上営農団地のあるところには、字池ノ谷戸(いけのやと)、天神谷(てんじんやと)、自正寺(じしょうじ)、梨子ノ木(なしのき)、小塚(こづか)の地名がありました。小名自性寺谷(じしょうじやと)に「村の西にあり、自正寺は天正 18 年の水帳にしるしたれば、正しく古き寺なりと見ゆれどいかなる故にていつの頃廃せしといふことを伝へず」とあります。村域の中央を南北に刻みこむ大きな谷戸で、入口付近を自正寺谷戸、上流部を天神谷戸が、西奥部を山伏谷戸と呼びならわしていました。



シリーズ
歴史の中の女性像 4

その1 ナイチンゲールの世界 (4)

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

看護の世界

フローレンス・ナイチンゲールといえば、看護の世界での活躍が良く知られています。ここでは、当時の中流階級以上の子女が、看護の仕事に就くということが、社会にどう受け止められたのか、当時のイギリス社会のコンセンサスを記すことにします。看護の世界に進むことがいかに大変な道、茨の道であったかを知っていただくために欠かせないと思えるからです。

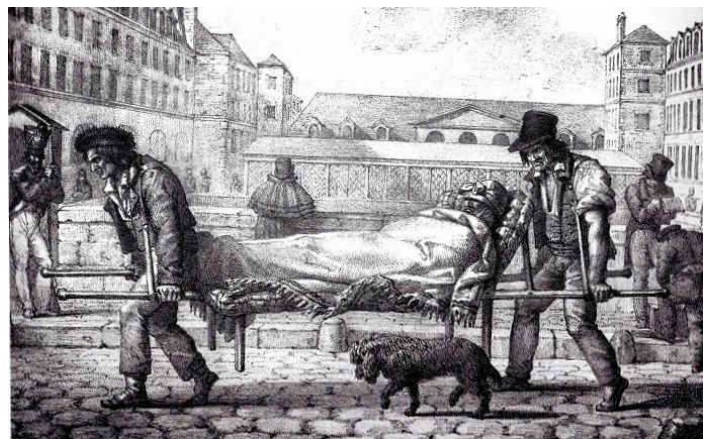
貧困家庭の女性は別として、上流階級や中流家庭の女性は家を守るのが仕事であって、職になど就くべきではない。最近では通用しなくなった言説ですが、明治以降の日本で昭和の時代まで長きにわたって通用した考え方です。この思考の元祖は産業革命期のイギリスだったのです。イギリス産業革命が本格化し、機械制工場が各地に登場するようになると、中産階級 (=ミドルクラス) と呼ばれる一群が登場します。この階層は、夫の収入で家族が生活していけるために、妻が家計の足しに働きに出る必要がないのです。そのため世の亭主族は、妻が働きに出ることを極度に嫌ったのです。出版界や言論界もこのムードに乗りました。「男子たるものひとたび世間に出れば、七人の敵に対峙しなければならず、日々疲労困憊の状態にある。それゆえ男子には、疲れを癒すための休息所が必要なのだ。家庭はその休息所でなければならない。」長く私は明治期の日本の創作だろうと受け止めていたのですが、何と 19 世紀イギリスの大衆小説家ジョン・ラスキンの小説の一説でした。これは男性の言ですが、19 世紀中頃に一般的だったイギリスの家庭観をよく表しています。当時のベストセラー作家として名高いビートン夫人も大ベストセラーとなった『家政読本』で、「妻たるものは、家庭が夫にとって癒しの場となるように、常に居心地の良い家庭を作らなければならない。」「主婦は家庭にあって家事を整え、召使いを監督し、健康で明るい家庭を築く責務を負っている。」と、中流家庭の妻たちを論じているのです。

中流家庭ですらこうなのです。上流家庭では、男たちも社交に精を出し、相互に訪問し合ったり、サロンに出入りしたり、政治に参画したりするのが常であり、婦人たちも気の利いた執事や女中頭に召使の監督を任せて、社交の世界に没頭し、社会的な仕事は、仲間たちと共同で行う慈善行為程度だったのです。上流社会では、婦女子が毎日働くことなど、考えることすらおぞましいことと避けられていたのです。まして、病院で看護師として働くことなど、とんでもないことだったのです。現代の我われは、重い病気にかかると、ホームドクターに紹介状を書いてもらって大病院で治療を受けるのを常としていますが、19 世紀や 20 世紀は全く違っていました。腕の良い医師は、患者の家を訪問し、そこで治療したのです。大事な患者を病院に入院させようなどと、考えることは 100% ありえなかったのです。当時の病院は、行き場のない病人を隔離するための場だったのです。貧民でさえ、病院へ行くのを嫌がり、病院へ連れていかれれば、治る病もなおらなくなり、最後は殺されると信じていたのです。ですから貧民仲間も、病気やけがの仲間を何とか病院に行かせず、仲間内で面倒見ようと助け合ったのです。病院とは衛生状態も悪く、ベッドも足りず、もちろん医師も足りない、死に行く人たちの収容所といった施設だったのです。さらにイギリスの病院は、大陸のフランスやドイツの病院に比べて決定的な欠陥を抱えていました。それは、エリザベス 1 世の父親ヘンリー 8 世が行った修道院解散令によって、イギリスには修道院がゼロとなり、行き場のない貧民を引き取って世話をする救貧院の役割を果たしていた修道院を失ったことで、修道女が病気の貧民の面倒を見る看護師として働く機会も無くなったのです。そのためイギリスでは、正しい訓練を受けた質の良い看護師は生まれず、看護師は女性の職業の中で、最も卑しい仕事に位置付けられていたのです。

修道女は社会の尊敬を集める存在ですから、イギリスにも修道女が存在していれば、フローレンスが看護師として働きたいと家族や周囲に打ち明けた時に、あれほど周囲揃っての強烈な拒否反応にあうこともなかったのではないかと私は考えます。

その修羅場は、次回に記すことにします。

続 く



病気の貧民は病院に運ばれた。
路上の人は誰も関心を向けていない。

第13回史跡見学会ご報告

10月25日(水)、幸い夏のような暑さが和らいだ一日、六義園、旧古河庭園、名主の滝公園、王子稲荷神社、飛鳥山公園と、都内城北地域の「江戸・明治期の庭園巡り」の旅を楽しんできました。

午前8時30分、定刻に新百合ヶ丘を出発。朝の渋滞がありましたが、10時には六義園に到着。50分間各自思い思いに園内を散策しました。中央の大きな池の周囲を囲むように、種々様々な大木が聳え立ち、一瞬都心にいることを忘れてしまいそうな一時でした。

続いて、西ヶ原の旧古河庭園へ。明治末から大正初期の西洋建築の粋を集めた居館と洋風庭園と和風庭園の二つの顔を持つ庭園が売りの名所です。ちょうど洋風庭園が秋バラの最盛期で、皆さん思い思いに好きな色合いのバラの花と香りを楽しみました。



名主の滝 男滝

昼食は、王寺駅の旧貨物ヤードの跡地に建った17階建ての「北とぴあ」ビル最上階の展望レストラン

「QUAD17」(クアドイチナナ)。新宿高層ビルを正面に見る借景に、「新百合ヶ丘や柿生はどの辺かなあ」と話しながらイタリア料理を楽しみました。食後に展望テラスを一周。名主の滝と王子稲荷神社に向かいました。滝の冷気で涼み、たくさんのおキツネ様に迎えられ、「王子の狐」の世界を満喫しました。

飛鳥山公園では、渋沢史料館と紙の博物館を見学、渋沢庭園の散策を楽しみました。王子は日本の洋紙産業の発祥の地。紙幣にできる洋紙の生産は、王子製紙にしかできなかったことから、紙幣の印刷工場も王子に置かれた事実などが記されていました。

2019年秋以来、4年ぶりの史跡見学となりましたが、今回は、来年4月に、佐倉の歴史民俗博物館と武家屋敷、臼井城址と臼井家の菩提寺円応寺と墓所などを訪ねたいと考えています。



旧古河庭園 バラ園

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日：12月9・16日(毎土曜日) 1月7・14・21・28日(毎日曜日)

◎開館時間：午前10時～午後3時

第21回特別展示 柿生隧道の建設

期間：8月12日(土)～12月16日(土)

会場：柿生郷土史料館特別展示室

かつて、真福寺から柿生中学校脇を通過して上麻生に抜ける道には、柿生隧道と命名されたトンネルがありました。長さは60.1m、当時は川崎市で唯一でした。

完成は1951年(昭和26年)9月。1978年(昭和53年)に取り壊され、現在のような切り通しになりました。

トンネルの建設は、特に柿生中学校への通学や、柿生駅や役所などに用のある、真福寺や王禅寺の人々にとって、長年の願いでした。トンネル建設の地元負担の大半は、真福寺が中心となって支出しています。祝賀行事の写真はそんな真福寺の皆さんの喜びの様子を、見事に写し取っています。

土木工事用の大型機材のない時代に、どのようにトンネルを掘り、工事を進めたのか。地元の先輩たちが今に残してくれた写真を見ながら、皆で想像してみましょう。



第90回 カルチャーセミナー 川崎市北部の鉄道史 ～昭和期の宅地開発を中心に～

日時：2023年1月21日(日) 13時30分～15時30分

講師：中川 洋氏(法政大学文学部兼任講師) 会場：柿生郷土史料館特別展示室

鉄道関連を中心に、川崎の産業遺跡の研究が続けられている中川洋先生をお迎えして、小田急沿線を中心に、鉄道が川崎市北部の景観をどのように変えてきたかを、小田急本線と新百合ヶ丘を起点とする小田急多摩線沿線の宅地開発と絡めてお話しいたします。

ボランティア募集のお知らせ

この度、運営ボランティアの方を追加募集いたします。役割は主に、①機関紙「柿生文化」の編集、紙面レイアウト、記事投稿者・印刷業者との調整②ホームページの更新管理、「お問い合わせ」への窓口、など。初歩的なパソコン操作、画像処理スキルが必要ですが、その他の知識は不要です。ご一緒に地域の歴史を楽しみませんか。

応募いただける方はホームページの「お問い合わせ」から連絡をお願いいたします。